

つどいの広場参加親子と本学1年生の オンライン交流実践報告 —新型コロナ感染予防を踏まえた リフレクション実習における交流の工夫—

On-line exchange practice report with Tezukayama frosh
and a parent and child class of child raising support center
—Device of an exchange reflection training
while doing”Corona”infection prevention—

岡澤 哲子¹・蜂須賀 綾子²・宇田 玲子³・江口 由美⁴
OKAZAWA Tetsuko HACHISUKA Ayako UDA Reiko EGUCHI Yumi

2021年度帝塚山大学子育て支援センター「まっぼっくり」主催の広場型事業「つどいの広場」の参加親子と、帝塚山大学1年生とのオンライン交流実践報告である。従来の授業形式とは異なり、2021年度は新型コロナ感染予防の必要性から、学生と親子との関わり時間をオンラインで行うこととなった。オンラインであっても1年次生の授業「基礎演習Ⅱ」のリフレクション実習の実技に関する学びを保障し、親子との交流を図るため、次の4点を工夫し実践した。

1. 親子と学生が出会う時の工夫
2. 子どもがオンラインのスクリーンに興味をもつための工夫
3. 対面保育と目標をできるだけ同等にするための工夫
4. 学生が楽しさを感じ、学びを意識するための工夫

1. はじめに

2019年度まで、本学の事業「つどいの広場」の後期には、授業科目である「基礎演習Ⅱ」として1年生が参加してきた。授業内容は、事前指導を受けた1グループ10名前後の学生が「つどいの広場」で親子との関わりを経験し、後日その様子を録画したものを見て振り返るものであった。2020年度は新型コロナ感染予防の必要性から「つどいの広場」自体が中止となった。2021年度は、やや感染状況が好転していたことから、参加家庭数を制限して「つどいの広場」は実施されていた。

そこで、学生と親子が従来のような対面では交流できないが、「基礎演習Ⅱ」のリフレクション実習の学びや親子の体験を保障するための他の方法がないか検討がなされた。吉田ら(2021)は「子どもの学びを保障する方法の一つとしてオンライン保育には意味がある」と述べており、また瀬々倉ら(2021)はオンライン双方向によるイベント型の子育て支援活動の成果を報告している。そこで、広場型である本事業においても親子と学生との交流の成果が図れるのではないかと考え、オンラインの方法が実践された。

¹ 帝塚山大学 教育学部 教授

² 帝塚山大学子育て支援センター 子育て支援指導員

³ 帝塚山大学教育学部共同研究室 準職員

⁴ 帝塚山大学子育て支援センター 準職員

2. 概要

(1) 実践期間と時間

2021年9月30日（木）～12月23日（木）の期間で10回 10:40～12:10（2限目）

(2) 実践場所

- ①帝塚山大学子育て支援センター、②帝塚山大学学園前キャンパス 18号館体育室、
③帝塚山大学学園前キャンパス 18号館実験実習室

(3) 計画及び実践者

教育学部教員1名、子育て支援センター所員1名およびつどいの広場担当総務課及び
教学支援課準職員各1名、本学1年生93名

(4) 実践方法

ZOOM（映像と音声を使って、相手とのコミュニケーションを可能にする機能が特に洗練されたツール）を使用し、上記(2)の①と②をオンラインで繋いで交流する方法をとった。10名前後の学生の動きや壁面装飾を場面に合わせて映せるよう、リモコン操作可能な10倍ズーム搭載のWebカメラを使用した。詳細を図1に示した。

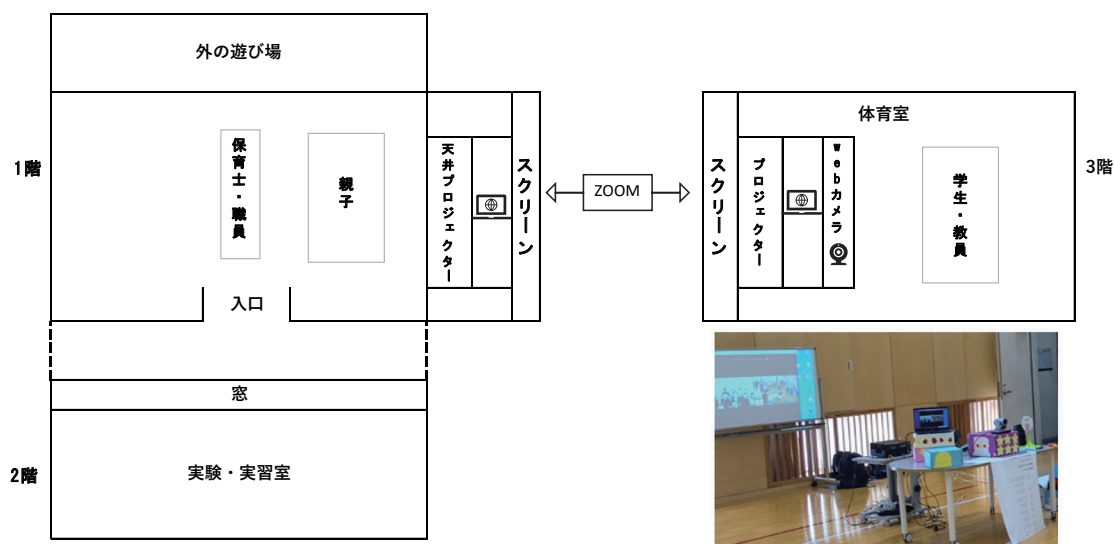


図1 オンラインの実施場所と機器の配置

(5) つどいの広場参加親子：内訳を表1に示した。

表1 つどいの広場参加親子内訳

	月日	10月7日	10月14日	10月21日	11月4日	11月11日	11月18日	12月2日	12月9日	12月16日	12月23日
参加人数内訳	参加子ども数	10	8	10	12	11	14	12	12	13	10
	参加組数	9	7	9	9	10	12	9	10	11	7
	合計	19	15	19	21	21	26	21	22	25	18
	同伴者（親）	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	兄弟姉妹同伴者（子）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
年齢内訳	0歳児	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	1歳児	2	4	4	4	2	7	4	6	3	2
	2歳児	5	2	2	2	6	4	4	3	4	4
	3歳児	3	1	3	5	2	2	3	2	5	3
子どもの性別	男子	6	5	6	8	6	7	7	8	7	3
	女子	4	3	4	4	5	7	5	4	6	7

(6) 実践内容

概略を表 2 に示した。

表 2 実践内容の概略

月日	参加 学生数	パソコン上 の 壁面	挨拶		手遊び	親子遊び	終わりの歌 他
			2階の窓から	オンライン			
10月7日	10	バス停と動物	声をかけ手を振る	動物パペット を使って	あたまかたひ ざボン	「バスにのって」	さよならさんかく
10月14日	9		声をかけ手を振る	動物パペット を使って	グーチョキ パーで何つく ろう	「バスにのって」 「お弁当箱の歌」	さよならさんかく
10月21日	9	落ち葉と どんぐり	こうもり飛行機を 飛ばす	動物パペット を使って	グーチョキ パーで何つく ろう (ハロウィン 版)	「カボチャのスープ」 のダンス	さよならさんかく
11月4日	5		両面折り紙で作った 飛行機飛ばし	動物パペット を使って	グーチョキ パーで何つく ろう	ボール遊び「こんなこ とできるかな」	さよならさんかく
11月11日	12		両面折り紙で作った 飛行機飛ばし	動物パペット を使って	手をたたきま しょう	ボール遊び「こんなこ とできるかな」	さよならさんかく
11月18日	10		折り紙落ち葉飛ば し	動物パペット を使って	手をたたきま しょう	葉っぱにタッチあそび	さよならさんかく
12月2日	8		折り紙の星と葉っ ぱ飛ばし マジックハンド使 用	サンタの帽子 をかぶって	グーチョキ パーで何つく ろう ペープサート 使用	「あわてんぼうのサン タクロース」 打楽器を使ってリズム をとりながら	さよならさんかく
12月9日	10		お花紙で作った雪 飛ばし マジックハンド使 用	サンタの帽子 をかぶって	グーチョキ パーで何つく ろう ペープサート 使用	「あわてんぼうのサン タクロース」 打楽器を使ってリズム をとりながら	さよならさんかく
12月16日	10	クリスマス	子育て支援セン ターの入口で お花紙で作った雪 と切り紙の雪の結 晶飛ばし マジックハンド使 用	サンタの帽子 をかぶって	グーチョキ パーで何つく ろう ペープサート 使用	「あわてんぼうのサン タクロース」 打楽器を使ってリズム をとりながら	サンタクロースの音 に気付かせる声掛け
12月23日	10		お花紙で作った雪 と切り紙の雪の結 晶飛ばし マジックハンド使 用	サンタの帽子 をかぶって	グーチョキ パーで何つく ろう ペープサート 使用	「あわてんぼうのサン タクロース」 打楽器を使ってリズム をとりながら	子育て支援センター の入口でプレゼント 渡し

3. 実践の詳細

記録は各日ごとに、次の順序で示した。

- ① 1 階の子育て支援センターの外庭で外遊びをしている親子に、ちょうど真上にあたる 2 階の教室の窓から挨拶（ねらいを伝え、観察するように指導した）
- ② オンラインでの挨拶（当日学生が言葉を考え、声を出す練習を行った）
- ③ 手遊び（当日に内容を示し 15 分間で学生が工夫を考え、練習を行った）
- ④ 親子遊び（当日に内容を示し 15 分間で学生が工夫を考え、練習を行った）
- ⑤ 壁面装飾（学生が映らない時のパソコンの背景として教員が作成した）
- ⑥ 終わりの歌（実践した教員の別の授業で一斉に練習しておいた）
- ⑦ 学生の振り返りから抜粋（振り返りは授業後に体育室で各自が記録した）

(1) 10 月 7 日（木）晴れ

- ①窓から学生が「おはよう」「後で遊ぼうね」と声を掛けた。

②子どもとの挨拶が元気よくできるように
また子どもが興味をもてるよう全員で
動物のパペットを動かしながら行った
(図 2)。



図 2 動物のパペットをもって全員で挨拶

③「あたまかたひざポン」をアカペラで行った。歌のリードは教員が行った。学生は、普通の速さです・少し速くする・少し遅くするの 3 グループに分かれて画面に映るようにスクリーンを見ながら移動を工夫しながら行った。

④「バスにのって」の曲に合わせて、小さいカラーリングをハンドルに見立てて動かして遊んだ。カラーリングは事前に子育て支援センターにも準備しておいた。

⑤親子遊びの内容に合わせて、「バス停に動物がいる」様子をアップで映した (図 3)。



図 3 バス停の壁面

⑥1 年生の関連する他の授業で全体練習をしてから臨んだ。歌のリードは教員が行った。

⑦学生の振り返りから抜粋

- ・友達同士ではなく、お母さんと遊んでいることが多いと感じた。(2 階の窓からの観察)
- ・挨拶はトーンを高くする方が明るくて優しい印象になる事がわかりました。
- ・オンラインは難しいと感じた。
- ・練習では最初は恥ずかしくて声が出せなかったけれど、本番では大きな声が出せた。
- ・しっかりと自分たちのことを見てくれていることに気づいた。
- ・「バスにのって」の動きでは少し大きさにする方が伝わりやすいとわかった。
- ・並行遊びとみられる様子を観察できた。

(2) 10 月 14 日 (木) 晴れ

① 先週と同様。

② 3 グループに分かれて画面に元気な感じで映るように、動物パペットを使って言葉かけを考え、事前練習を繰り返してから臨んだ。

③ 学生が主体的に工夫できるように「グーチョキパーで何つくろう」に変更した。歌のリードは教員が行った。3 グループに分かれて、グーチョキパーで作るものをそれぞれ考えて、画面に映るようにスクリーンを見ながら移動方法を工夫して行った。左右の手を歌詞と反対の手にして動かすことができるように練習した。

④ 先週の親子遊びの後、バスがついた後に「遊園地かな？お弁当食べたいね！」と教員が言ったことからお弁当を食べる真似をする子どもがいた。そのため、今週は親子遊びの「バスにのって」の後、子育て支援センターの方で手遊び「お弁当箱の歌」を行うことになり、学生はその手遊びにスクリーン上で参加した。

⑤ 先週と同様。

⑥ 子育て支援センターの方で保育士が行い、学生は映像で参加した。

⑦ 学生の振り返りから抜粋

- ・お母さんの真似をして遊んでいる子が多いと感じた。

- ・砂場では、裸足で遊んでいる子がいた。五感を楽しんでいるのかと思った。
- ・真剣な顔で見えてくれて、手を振ると振りかえしてくれた。
- ・大きな声で「お弁当箱の歌」を歌っている子どもがいた。
- ・手遊びの速さはゆっくりとする方がわかりやすいことが分かった。
- ・パペットの動物が話しているようにすると子どもが興味をもってくれた。
- ・画面が小さいので、全員で映るより何人かが大きく見えるようにするのがいいという事に気づいた。

(3) 10月21日(木) 晴れ

① 窓から、学生が作った「折紙飛行機」を飛ばしながら挨拶をした(図4)。下にいる親子が、上から飛んでくる紙飛行機に気づき、拾ったりつかんだりしようとしていた。また、それを遊具の上から飛ばそうとしている子どももいた。



図4 2階の窓から
紙飛行機飛ばし

② 季節の行事「ハロウィーン」が近いことから、カボチャの帽子を作って全員がかぶり、3グループに分かれて画面に元気な感じで映るように言葉かけを考えて事前練習を繰り返してから臨んだ。

③ カボチャの帽子をかぶり、3つのグループに分かれて「グーチョキパーで何つくろう」のハロウィーンバージョンを考えて行った。例：パーとパーでお化け

④ 学生全員がかぼちゃの帽子をかぶって「カボチャのスープ」のダンスを踊った。子どもたちには食べ物の形をした小さなマラカスを配るよう子育て支援センター側に事前に依頼しておいた。子どもたちはそのマラカスを振って学生の踊りに参加した。最後にカボチャのスープがアップで映るようにした(図5)。



図5 かぼちゃのスープ(左端)と
かぼちゃの帽子をかぶった学生

⑤ 秋の季節を感じるように、粘着ボードに折紙で作った落ち葉とどんぐりを貼ったものを使用した(図6)。

⑥ 1年生の関連する他の授業で全体練習をしてから臨んだ。リードは教員が行った。

⑦ 学生の振り返りから抜粋

- ・紙飛行機を拾って、ありがとうと言ってくれてうれしかった。
- ・紙飛行機をもっていない子にあげたりしている子どもがいて、そのような心が育っていると感じた。
- ・手遊びで表現したこうもりが見えやすいようにカメラに近づけたが、近づいても見えにくいとわかった。
- ・スープの温かさが伝わるように「温かいスープ」と言う時の声かけが大切だとわかった。
- ・動いている物や音が出ている物に興味をもつことが分かった。

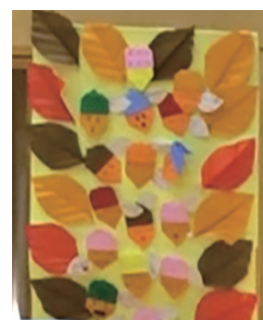


図6
落ち葉とどんぐり

- ・ マラカスを振ってくれて、一緒に遊んでくれているような気がした。
- ・ 次は対面でやりたと思った。

(4) 11月4日(木) 晴れ

① 少し厚い折紙を使用し、ゆっくりと空中を飛ぶ紙飛行機(図7)を作って飛ばしながら挨拶をした。

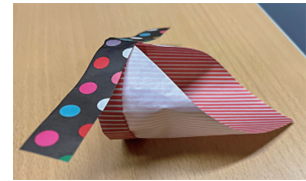


図7

ゆっくり飛ぶ紙飛行機

② 10月14日と同様

③ 10月14日と同様

④ 柔らかいオレンジ色のボール(直径15cm)

を使って親子のボール遊びを行った。子どもたちにも同じボールを配るように子育て支援センター側に事前に依頼しておいた。学生は3グループに分かれて、ボールをほっぺやお尻で挟む・ボール突き・ボール転がし・キャッチ、などをするのを見せながら、「うちのひととできるかな」と言葉を掛けながら遊んだ(図8)。最後に「あんたがたどこさ」の歌でボール遊びをするパフォーマンスを学生が見せた。



図8 ボール遊びの様子(お尻で挟む)

⑤ 先週と同様。

⑥ 先週と同様。

⑦ 学生の振り返りから抜粋

- ・ 力を入れないで飛ばす飛行機だよと一度言っただけで上手に飛ばしている子どもがいて驚いた。
- ・ 自分たちがしていなかったボール遊びを子どもたちは次々とやっていた。遊ぶ力が素晴らしいと思った。発想がすごいと思った。
- ・ 難しい飛行機飛ばしに何度も何度も挑戦し続けていた。
- ・ 手遊びで自分なりに手の動きを私たちに寄せてきているのがわかった。

(5) 11月11日(木) 晴れ

① 先週と同様。

② 10月14日と同様。

③ 「手をたたきましょう」を歌いながら、「手をたたく」「足踏み」「笑う」「なく」などの動作を楽しんだ。

④ 学生は3つのグループに分かれて「こんなことこんなことできるかなー」と声を掛けてから、ボールを挟む(お尻と頬)・



図9 ボール遊びの様子

ボール投げ上げ・転がしキャッチ・トンネルくぐりなどをして、親子がそれを真似するという遊びをした(図9)。

⑤ 10月21日と同様。

⑥ 10月21日と同様。

⑦ 学生の振り返りから抜粋

- ・ ボール遊びを、自分ができる範囲でやっているところがかわいかった。
- ・ オンラインだと子どもの反応が見えにくい、対面だともっと子どもたちに対して臨機応変にしな

ければならないので、もっと慣れていく必要があると思った。

- ・動作や声を大きくすることが大切だと思った。
- ・ボールを床と自分の体で挟むなど自分だけの遊びをしていた。
- ・「できたかな」の声掛けが大切だと思った。
- ・最後の多くの子が手を振って「バイバイ」と言ってくれていることに気づいてうれしかった。

(6) 11月18日(木) 晴れ

①様々な色の折紙で葉っぱを作って2階の窓からひらひらとなるように落としながら挨拶をした。

②10月14日と同様。

③先週と同様であるが、顔の表情がしっかり見えるようにカメラに近づいた。

④「葉っぱにタッチあそび」を行った。2階から挨拶をしたときに飛ばした葉っぱに、2色の折紙をずらして巻いて作った持ち手をつけたものを使用した(図10)。それを一人がもって、CD曲「きのこ」に合わせていろいろなところへ動かす。そして相手は、葉っぱのあるところへ移動して葉っぱにタッチする遊びをした(図11)。



図10
持ち手がついた葉っぱ



図11 葉っぱタッチあそび

⑤10月21日と同様。

⑥10月21日と同様。

⑦学生の振り返りから

- ・実際に目の前にいると手遊びの反応があったかもしれない。
- ・飛ばした葉っぱを拾って、滑り台の上からまた飛ばしている子どもがいた。楽しく遊んでくれていると思った。
- ・葉っぱタッチの遊びの後も、葉っぱをもってはしゃいでいた。
- ・落ちてくる葉っぱに向かって、手を広げて全力で追いかけていた。
- ・葉っぱタッチをもっと大きめにすればよかったと思った。

(7) 12月2日(木) 晴れ

①金色と銀色、他の色の折り紙で星を折り、2階の窓から飛ばしながら挨拶をした。先週使用した葉っぱも混ぜて飛ばした。窓から飛ばすときにできるだけ遠くに飛ばそうにマジックハンドを使った(図12)。



図12 マジックハンドと折紙の星

②サンタクロースの帽子をかぶって、3つのグループに分かれて、それぞれ違う言葉がけをして挨拶をした。

③「グーチョキパーで何作ろう」のクリスマスバージョンとして、手遊びと同時にペープサートでもできたものが見えるようにした。また、背景に黒のパネルを置いて、見やすくした。グーとグーで「ゆきだるま」(図13)、チョキとチョキで「ナカイさん」(図14)、グーとチョキで「サンタさん」(図15)とした。

④「あわてんぼうのサンタクロース」の遅い速度のバージョンの曲を流して、歌いながら楽器（カスタネット・鈴・トライアングル）を鳴らしたり、踊ったりする遊びをした。打楽器は事前に子育て支援センターに準備しておいた（図 16）。

⑤色画用紙で動物のサンタクロースを作成し青いボードに貼って使用した（図 17）。ダンスの時に映るように体育室の壁に色画用紙で作ったそりに乗ったサンタクロースを貼った（図 16）。

⑥10月21日と同様。

⑦学生の振り返りから抜粋

- ・同じ遊びを繰り返して楽しんでいる。
- ・飛ばした葉っぱや星を拾い集めてそれでまた遊んでくれているのがうれしかった。
- ・打楽器を鳴らしてくれているのがわかって、自分たちも楽しかったことが子どもたちに伝わったかなと思った。
- ・近くで子どもたちと関わりたくなりました。
- ・あわてんぼうのサンタクロースの踊りでは、どうしたら子どもたちを楽しませられるかを考えながら歌いました。
- ・手遊びを歌う時に「間」を効果的に取ることが大事だと気づいた。

(8) 12月9日（木）晴れ

①お花紙で作った白い小さい花を雪に見立てて、2階からマジックハンドを使って、飛ばした（図 18）。



図 18 お花紙の雪

②先週と同様。

③～⑥先週と同様。

⑦学生の振り返りから抜粋

- ・子どもの半数が1歳児だったので、2階から飛ばした雪に気づかない子どもが多かった。
- ・形とか左右とか若からなくてもリズムを体で感じている様子があった。
- ・ペープサートを見せる前に「何かな？」と言葉を掛けることが大事だと思った。
- ・自分たちが楽しそうにすれば、子どもたちも楽しくなるんだという気持ちだった。
- ・もっと自分をさらけ出さないといけないと思った。

(9) 12月16日（木）曇り

①気温が低かったので外に出る子どもがいなかったため、子育て支援センターの入口に行って、マジックハンドを使って、先週の雪と切り紙の雪の結晶（図 19）を子どもたちとの距離を保って高いところから落とすようにした。



図 13 ゆきだるま



図 14 トナカイさん



図 15 サンタさん



図 16 壁面のサンタクロースとあわてんぼうのサンタクロースのダンス



図 17 動物のサンタクロース

②～⑤12月2日と同様。

⑥この日は、子育て支援センターにサンタクロース（4年生のボランティア学生）が来て子どもたちにプレゼントを渡すこととなっていた。そのため、1年生は耳に手を当てて「あれ一何か聞こえてくるよ」と言って子どもたちをドキドキさせる役割になった。おわりのうた「さよならさんかく」は保育士がリードをした。



図 19 切り紙の雪の結晶

⑦学生の振り返りから抜粋

- ・お花紙で作った雪についている輪ゴムを指にはめたり、掃除機のようにおもちゃでコロコロ雪を集めたり、いろいろな遊びをしている子がいた。
- ・雪の結晶よりも雪の方に興味をもっている子が多かった。触り心地がいいからだと思う。
- ・あわてんぼうのサンタクロースの時のみんなが自然と笑顔になるのがすごいと思った。

(10) 12月23日（木）曇り

①2階からお花紙で作った雪と切り紙の雪の結晶を飛ばして挨拶をした。

②～⑤12月2日と同様。



図 20 プレゼントの
雪だるま



図 21 プレゼント渡し



図 22 入口でさよなら

⑥学生が子育て支援センターの入口に行って、距離をとってプレゼント（雪だるま）を渡した（図 20・21）。プレゼントの雪だるまは、授業が始まってすぐに学生全員で完成させておいた。「さよならさんかく」は保育士がリードした。歌った後、学生は入口のところでさようならの挨拶をした（図 22）。

⑦学生の振り返りから抜粋

- ・歌う時、一人ずつカメラに近づいたので子どもが喜んでいました。
- ・プレゼントを渡すと「ありがとう」とかえてくることに感心した。
- ・ペーパーサートを見やすくするために黒のボードを使っており、環境の工夫が大事だと思った。
- ・近い距離でプレゼントを渡すことができてよかった。かわいかった。
- ・音楽を楽しんでいる子どもが多い。

4. まとめ

新型コロナ感染予防を踏まえた本学子育て支援センターの事業「つどいの広場」参加親子と本学1年生のオンライン交流実践において、オンラインであっても学生の授業「基礎演習Ⅱ」のリフレクション実習の実技に関する学びを保障し、また親子との交流を図るための工夫を次の4点にまとめた。

(1) 親子と学生が出会う時の工夫

外遊びをしている親子に届くように、2階の窓から「おはよう」「後で遊ぼうね」

などの声を掛けた。また、紙飛行機・折紙の葉っぱ・折紙の星・お花紙の雪・折紙の雪の結晶を 2 階の窓から飛ばしたことは、距離が離れているからこそ発想できた工夫であり、親子と学生の出会いが楽しくわくわくするものとなった。

(2) 子どもがオンラインのスクリーンに興味をもつための工夫

声は大きく高いトーンで元気よくゆっくりと話すようにした。学生は子どもたちに身近な動物のパペットをもって挨拶した。各場面で学生の顔や遊びが大きく映るよう、スクリーンに近づいたりするようにした。また、学生が映っていない時間帯も、パソコンの画面に子どもの興味をひく動物などが映るような壁面を設定した。

(3) 対面保育と目標をできるだけ同等にするための工夫

森野ら（2021）は「対面保育と目標を同等にすることを目指し、オンライン保育をデザインするには、対象となる保育が、子どものどのような育ちを目指すものであるかを再認識することが鍵となる」と述べている。本報告は通常の保育ではなく子育て支援の場の保育ではあるが、オンラインであるため、特に言語・表現の領域において対面の目標と同等の価値にする必要があると思われた。音楽表現の領域では、子どもたちの反応を見ながら、歌の速さを変えたり、言葉をはさみながら進めたりする工夫をした。言語表現の領域では「挨拶」を元気な声ですることや、ペープサートによって言葉を視覚化することも行った。造形表現の領域では、季節感を感じられるようにしたり、視覚や触覚などの五感を刺激するものを作ったりして遊びに取り入れた。身体表現の領域では、他の表現領域との総合的な遊びになるように、好きな打楽器を選んでならして踊ったり、ボールやカラーリングを自由に使って動き遊びをしたりするなど、基礎感覚を中心とした身体の地図の把握が育まれるような遊びを選ぶようにした。

(4) 学生が楽しさを感じ、学びを意識するための工夫

授業の構成上、学生が保育案を作成する時間が取れず、教員が保育案の概略を作成した。また、当日の学生の練習時間が少なかった。そのため、当日できるだけ学生が主体的にできるよう、グループで役割を決め、学生自身が挨拶の言葉がけや、グループで映るところや全体で映るところなどを考えて、カメラに近づいたり離れたりするなどカメラを効果的に使うような工夫を行った。しかし、1 年生で経験が少ないため、声掛けや歌声が小さくてスクリーン上で聞こえにくくなる可能性があったので、保育案を作成した教員が、歌を確実に届けられるように言葉がけも含めて声のリードをするようにした。

引用文献

- 森野美央・倉田伸・前田桂子・古谷嘉一郎（2021）コロナ禍の親子広場における子育て・子育て支援の現状と課題：オンライン保育での手遊びと、領域「表現」・「言葉」で示されている価値との関連を手がかりに。長崎大学教育学部教育実践研究紀要. 20. 131.
- 瀬々倉玉奈・清水文（2021）子ども・子育て支援の学びと ICT：オンラインぴっばらん活動のプロセス。京都女子大学教職支援センター研究紀要. 3. 121-134.
- 吉田貴子・岩本茉莉（2020）コロナ禍における保育の果たす役割 ―カリフォルニア州私立幼稚園におけるオンライン保育をてがかりに―（2020）大阪国際大学紀要. 34-1. 79.